

自己評価報告書

平成23年4月18日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520346

研究課題名（和文） 認知類型論による文法格の意味図構築に向けて

研究課題名（英文） Semantic Map Research on Grammatical Case

研究代表者

ナロック ハイコ (Narrog Heiko)

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：40301923

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：意味図、格、モダリティ

1. 研究計画の概要

(1) 本研究は、認知言語学的なアプローチによる言語類型論の研究において、言語間に普遍的に見られる文法機能や語彙的意味の表示に用いられる意味図 (semantic map) を実証的な方法によって構築することを目的とした。特に次の2つが中心課題である。

①文法格の普遍的な意味を記述する意味図の構築すること。

②意味図を構築するための客観的に検証可能なアルゴリズムの開発をする。

(2) 以上の2つの課題解決に向けて、本プロジェクトでは200の言語からデータを採取し、特に「共格 (comitative) および道具格 (instrumental)」などのいわゆる「周辺格」に焦点を当てた研究を行うものだったが、モダリティなど、他の文法範疇も付け加えた。

2. 研究の進捗状況

(1) 意味図・文法記述関連資料の収集およびデータベースの構築に努めた。研究当初に持っていた「道具格」、「共格」の、200の言語に基づいたデータに「動作主」、「奪格」の関連のデータを加え、さらにモ

ダリティ領域では200の言語について、モダリティとヴォイスとの関係に関するデータを集めることができた。今後もそれぞれの領域でデータを増やす予定である。

(2) まず「共格」と「道具格」を中心にした共時的な意味図を打ち出し、発表した。それから「動作主」「奪格」領域についての意味図、「与格」「目的格」領域についての意味図も打ち出し、さらにそれぞれの意味図に関して意味図間のつながりの歴史的方向性についての仮説も提示し、論文で発表することができた。また、その意味図の中で3つ以上の意味が関係し合う意味図のつながりに関して、いくつかの普遍的含意の存在を示すこともできた。ただし、「与格」「目的格」の領域においては、先行研究の仮説に頼り、まだ独自のデータを集めることができていない。今後それを付け加えることによって研究の精密化を図ることができる。

(3) モダリティや動詞の自他など、他の文法範疇についても、意味図構築を行った。モダリティに関しては、多義的な「う・よう」についての意味図を作成し、口頭発表を行った。(1)で述べたモダリティとヴォイスとの関連について集めた200の

言語のデータに基づいても、意味図を提案することができて、学会誌論文として採用されることに至った。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

意味図の構築に関しては期待以上の成果を上げることができたが、アルゴリズムの開発については、期待した成果を得られていない。

4. 今後の研究の推進方策

後1年だけ残っているが、次のことを計画している。

(1) 収集資料の電子化

(2) 意味図研究で得られた「格」についての結果と一般言語学的に主張されている言語変化・意味拡張についての仮説との比較

(3) 「格」データへの多次元尺度法分析の応用

(4) 「格」領域以外の文法範疇における意味図研究の更なる推進

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

1. Narrog Heiko, A diachronic dimension in maps of case functions, *Linguistic Discovery*, 8/1, 233-254, 2010、査読有
2. Narrog Heiko, Voice and non-canonical marking in the expression of event-oriented modality – a cross-linguistic study, *Linguistic Typology*, 14/1, 71-126, 2010、査読有
3. Narrog Heiko, What should be on a map?, *Linguistic Discovery*, 8/1, 96-98, 2010、査読有
4. Sanada Haruko & Gabriel Altmann, Diversification of postpositions in Japanese, *Glottometrics*, 19, 70-79, 2009、査読有
5. 小野 尚之, クオリア構造入門、『レキシコンフォーラム』, 4, 265-290, 2008、査読有

[学会発表] (計3件)

1. Narrog Heiko, Directionality in semantic and syntactic change – the case of modality, ACLC Workshop on Grammaticalization, 2010年11月10日、Universiteit van Amsterdam、オランダ
2. Narrog Heiko, Synchrony and diachrony in transitivity pairs, Eighth Biennial Conference of the Association for Linguistic Typology, 2009年7月26日、University of California, Berkeley, USA
3. Narrog Heiko, Asymmetry between positive and negative speech-act modality and the semantic map of the imperative-hortative area, 18th International Congress of Linguists (CIL 18), 2008年7月26日、ソウル、韓国

[図書] (計6件)

1. Narrog Heiko, Modality in Japanese – The Layered Structure of Clause and Hierarchies of Functional Categories, Amsterdam, Benjamins, 274pp, 2010.
2. Malchukov, Andrej & Heiko Narrog, Case Polysemy. Malchukov, Andrej & Andrew Spencer (eds.): *The Oxford Handbook of Case*, 593-600, 2009
3. Narrog Heiko, Instrumental. Malchukov, Andrej & Andrew Spencer (eds.), *The Oxford Handbook of Case*, 518-534, 2009.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]